

**St. Luke's College of Nursing
RCDNP Annual Report 2011**

**2011 年度聖路加看護大学
看護実践開発研究センター報告書**

きぼうときずな福島県災害支援プロジェクト特別版





CONTENTS

■ 看護実践開発研究センターとは	3
■ センター長・各部門長挨拶	4～5
■ きぼうときずな 福島県災害支援プロジェクト	6～12
■ PCC実践開発部門	

ナースクリニック

1. 聖路加健康ナビスポット るかなび	14
2. 赤ちゃんがやってくる	14
3. ルカ子母乳育児相談	14
4. ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ	14
5. 乳がん女性のためのサポートプログラム	15
6. 子どもの健康、知ろう、考えよう	15
7. 天使の保護者ルカの会	15
8. リンパ浮腫ケアステーション	16
9. 多世代交流型デイプログラム 聖路加 ^{なご} 和みの会	16
10. 転倒骨折予防実践講座	16
11. 認知症の人のご家族のためのリフレッシュ・プログラム	17
12. 在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング	17
13. 高齢者のご家族へオンリーワンの「思い出帳」 ^{メモリーブック} 作りプロジェクト	18

市民健康講座

1. 保護者・支援者のための予防接種講座	18
2. 家で死ねるまちづくり はじめの一步の会	18
3. 中央区民カレッジ（まなびのコース）	18
4. 中央区民カレッジ（シニアコース）	19
5. 聖路加市民アカデミー	19
6. 新健康カレッジ	20

WHO看護協力開発センター事務局	20
------------------	----



■ キャリア開発支援部門

ナーススキルアップ

1. 看護管理コンサルテーション	22
2. 緩和ケアコンサルテーション	22
3. 在宅看護コンサルテーション	22
4. 看護教育コンサルテーション	22
5. 「語り合おう！看護マネジメント 看護管理者のための‘サポートグループ’」	22
6. 退院調整看護師養成プログラムと活動支援	23
7. 精神看護事例検討会	23
8. がん看護事例検討会	23
9. 英文献を読もう！パートⅠ ～基礎編～	24
10. 英文献を読もう！パートⅡ ～構文理解強化コース～	24
11. 訪問看護スキルアップセミナー	24
12. 不妊症看護認定看護師ポストコース	25
13. 性と健康に関わる専門職のためのリトリート講座	25
14. 聖路加感染症アカデミー「看護職のための予防接種講座」	25
15. 実践・在宅ケア入門～すべての対象者に緩和ケアを～	25

認定看護管理者ファーストレベル講習	26
-------------------	----

認定看護師教育課程	不妊症看護コース・がん化学療法看護コース・訪問看護コース	26
-----------	------------------------------	----

■ 研究活動支援部門

1. 研究相談	27
---------	----

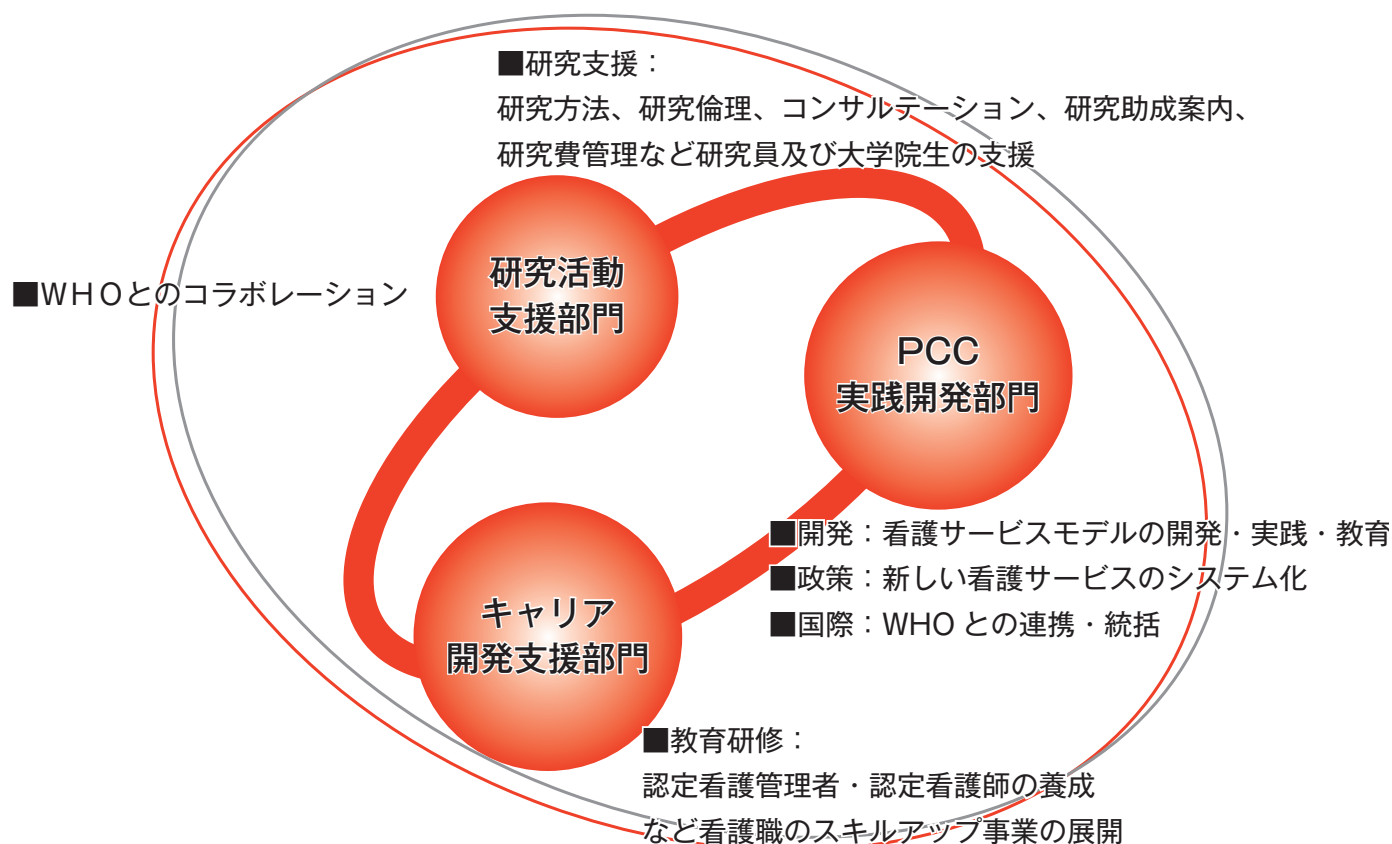
■ 2011年度教育・研修におけるセンターの活用状況	28
----------------------------	----

■ 2011年度看護実践開発研究センター 運営委員会・専任研究員・支援室スタッフ	28
--	----

看護実践開発研究センターとは

少子高齢社会で生じている健康問題や社会の動向を、看護の視点でグローバルに捉え、科学的根拠を集積し、市民とのパートナーシップをとりながら、看護の提供方法を開発・研究することを目的とし、開設されました。また、国際的な活動の基軸として、WHO コラボレーティングセンターとしても機能しています。研究センター長のリーダーシップのもとに、「People Centered Care(PCC) 実践開発」「キャリア開発支援」「研究活動支援」の3つの部門が機能しています。「PCC 実践開発」では、さまざまな健康課題をお持ちの個人や家族あるいは地域（集団）に対して、新たな看護を開発することを目的に、市民の皆様とともに協働し研究を推進します。「キャリア開発支援」は医療現場で活躍している看護職を対象に、より良い実践を目指した教育を行っています。「研究活動支援」は、研究センターで実践、研究、教育に携わる教員や学生たちが、よりよく活動できるためのさまざまな支援を行っています。

おもに、看護実践開発に関わる研究と、その支援体制の確立、国際的・学際的な交流事業、市民・専門職に対する生涯学習事業、看護サービスのモデルとなる実践の場の提供などの事業を行います。また、これらの研究事業をつなぎ、成果を蓄積し、臨床の場に提供できるようなデータベースを開発していきます。



センター長挨拶

看護実践開発研究センター センター長 山田 雅子

今年は東日本大震災を経験し、ケアの必要性とケアを生活者に届けることの重要性を強く感じました。慢性疾患を抱えながら自宅を追われ避難所生活を始めた人たちが要介護状態で避難所での生活を強いられた人々など、福島県内での支援活動を継続している中で、環境と健康課題のつながりを目の当たりにして考えさせられた一年でした。

被災地の人々が必要としていたのは、適切な食事、気兼ねなく排泄すること、体を動かすこと、プライバシーを守ること、暖かいふれあいがあること、自分の役割を持つことなどでした。これはいずれも医学的な治療ではなくケアに対するニーズです。ケアが不足している状況でも生きる力がそれを超える方も多く見受けられましたが、ケアの不足した状況から健康を害し死にいたる人もありました。そうした状況で看護ができることは、そこにある生活と体・心の健康の総合的な判断の中で、個々のリスクアセスメントしていくことであり、リスクが高い場合は、周囲の方々と協力して環境改善を図っていくことであります。そして人々と共にケアの連鎖をつないでいくことが震災に限らず超高齢社会を迎えた日本で行わなければならない仕事なのだと思います。

看護実践開発研究センターは People Centered Care の理念にたって活動しております。看護職だけでは大きな課題に立ち向かうことはできません。市民の皆様と共に、よりよく生活することができる環境づくりにチャレンジしてまいりたいと思います。

福島県での支援は皆さまの大きな力をお借りし、一年間続けることができました。心より感謝申し上げます。又、本研究センターの活動を理解し、経済的に支援下さったテルモ株式会社に深く感謝申し上げます。



PCC 実践開発部門

PCC 実践開発部門長 亀井 智子

PCC(People-centered care) 実践開発部門は「ケアを受ける人を中心とした看護の開発」を主軸において、地域で生活する多様な世代にある多様な健康課題をもつ人々をその対象として、看護の実践的开发をすすめています。

各事業で対象とした人と健康課題は、妊娠中の女性とその家族、授乳育児中の母子、周産期に赤ちゃんをなくされた家族、乳幼児や子どもをもつ家族、女性特有の疾患に関心をもっている方、乳がんをもつ女性、高齢者の介護を行う家族、認知症をもつ高齢者、転倒予防に関心のある高齢者、健康や介護予防について学習したい高齢者、慢性呼吸不全をもつ方、小中学生、ボランティア等で、それぞれ専門性の高いものです。これらはユニークな名称のもと、下記の 18 の看護ケア研究事業として展開され、年間計 3,508 名の市民のご参加・ご利用をいただきました。

また、この部門に属する研究事業全体としての質の管理を「構造 - 実践過程 - 成果」の各要因から評価・分析し、今後さらに実践の質を向上するために、部門ミーティングを行い、各事業の内容や課題、および様々な対象者に安全に事業を展開するための方法について話し合いました。今後も本学研究者と市民の皆様との協働により、看護実践のあり方を研究開発していきたいと考えおります。



2011 年度 PCC 実践開発部門研究事業名

- 赤ちゃんがやってくる ■ルカ子母乳育児相談 ■ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ
- 天使の保護者ルカの会 ■天使の保護者ルカの会；グリーンカウンセリング
- 乳がん女性のためのサポートプログラム ■リンパ浮腫ケアステーション
- 子どもの健康、知ろう、考えよう
- 高齢者とご家族へオンリーワンの「思い出帳(メモリーブック)」作りプロジェクト
- 多世代交流型デイプログラム聖路加和みの会 ■転倒骨折予防実践講座
- 保護者・支援者のための予防接種講座 ■家で死ねるまちづくり はじめの一步の会
- 聖路加健康ナビスポット るかなび
- 在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング ■認知症の人のご家族のためのリフレッシュ・プログラム
- 聖路加市民アカデミー ■新健康カレッジセミナー

キャリア開発支援部門

キャリア開発支援部門長 松谷 美和子

キャリア開発支援部門は、看護師、保健師、助産師がより良い実践を行うために看護職者としての資質及び実践力の向上を支援することを目的とした部門です。2011年度は、「認定看護管理者ファーストレベル講習」をはじめ、「不妊症看護」「がん化学療法看護」「訪問看護」の各認定看護師教育課程を開講し、149名の修了生を輩出しました。

〈ナーススキルアップ講座〉では、コンサルテーション（看護管理、緩和ケア、在宅看護、看護学教育）、看護管理者支援プログラム、退院調整看護師養成プログラム、事例検討会（精神看護、がん看護）、看護英語文献読解クラス（基礎編、構文理解強化）、不妊症看護認定看護師あるいは訪問看護認定看護師を対象としたスキルアップセミナー、在宅での看護技術を振り返る「実践・在宅ケア入門」のほか、「性の健康に関する専門家リトリートプログラム」、「看護職のための予防接種講座」を開講し、380名の方が参加されました。これからも看護実践の質の向上をもって人々への福利へ貢献することをめざして看護専門職者の自己研鑽プログラムを開発し、提供していく所存です。



研究活動支援部門

研究活動支援部門長 有森 直子

当部門の役割・職務は、市民の健康生活の向上に資する看護の実践開発を促進するため、本学の教員ならびに研究員、大学院生の研究活動を支援することにあります。

2011年度の活動は(1)研究助成金情報の提供(29件) (2)文部科学省及び厚生労働省の科学研究費の申請及び経理等手続きの支援(62件) (3)研究員及び大学院生に対する研究コンサルテーション(33件) (4)研究員及び大学院生に対する研究倫理コンサルテーション(0件) (5)研究助成に関する選考委員会規程の策定と審査手順に基づいた選考(0件)でした。

2011年度の文部科研究費採択率は、80%と全国採択率30.3%をはるかに上回る成果でした。2012年度はさらに86%という非常に高い採択率でした。

今後の重点活動としては、研究コンサルテーションを通じて把握した学習ニーズに対する臨床研究に関連した学習会の開催、研究倫理コンサルテーションの実施、助成金獲得のための情報交換等を行う会の開催があります。アカデミックな風土の中で、新しいケアが創生されるよう、部門員一同、皆様を支援していきたい所存です。市民、研究者のどちらの立場からも当部門の活動に対するご意見をぜひお寄せください。





きぼうときずな 福島県災害支援プロジェクト



■きぼうときずな 福島県災害支援プロジェクト

「きぼうときずな」 聖路加看護大学福島県災害支援プロジェクト活動報告

I. はじめに

2011年3月11日14時46分に日本を襲ったマグニチュード9.0の巨大地震は、千葉県以北の太平洋側ほぼ全域に未曾有の被害をもたらした。特に福島県は、地震、津波、原子力発電所の事故と3重の被害に見舞われた。その上、放射線に関連したさまざまな風評も影響し、当時は他県からの支援を受けにくい状況にあった。聖路加看護大学が何かできることはないかと考えていた時、NPO法人日本臨床研究支援ユニット（理事長大橋靖雄 東京大学医学部教授）による東北地方災害支援のための「きぼうときずなプロジェクト（以下、きぼうときずな）」と出会った。「きぼうときずな」のミッションは「支援活動を通じた被災住民のニーズ把握と行政への情報提供、健康維持・増進のための被災者への情報提供はいかにあるべきかに関する検討、避難所から仮設住宅まで継続して行う看護活動の実践、これら活動から得られた情報に基づき、今後の高齢者健康対策に提言を行う」ことであった。聖路加看護大学はその活動趣旨に賛同し、井部学長のリーダーシップのもと、本学研究センター事業として「福島県災害支援プロジェクト」を立ち上げ直ちに活動を開始した。

本記録は、2011年4月末の活動開始から2012年3月末日までの当プロジェクトの活動について報告する。

II. 活動概要

1. 活動地域と参加者

活動地域はいわき市、相馬市、郡山市である。NPO法人日本臨床研究支援ユニットおよび聖路加看護大学福島県災害支援プロジェクトの担当者が、いわき市と相馬市については4～5月、郡山市については5～6月にかけて複数回現地入りし、現地保健センターの保健師などと活動内容や看護師・保健師派遣スケジュールの調整を行った。そして、いわき市では4月29日、相馬市は5月7日、郡山市は6月9日より、聖路加と縁のある看護師・保健師の派遣を開始した。活動概要を表1に示す。

派遣者募集は、教員・大学院生・本学認定看護師教育課程修了生への口頭及び電子メールでの呼びかけ、同窓会への案内状の送付、第16回聖路加看護学会学術集会での活動報告時の協力依頼などによって随時行った。その結果、2012年3月までに全国各地から本プロジェクトの趣旨に賛同し、参加協力の意思表示をした172名が参加登録した（表2）。本学教員は出張扱いとし、大学院生は指導教官と相談のうえ、学外からの参加者は休日や有給休暇を利用して、現地での支援活動に参加した。なお本学教員と学生は「出張届（教員のみ）」と「福島県災害支援プロジェクトボランティア活動届」を総務課に提出し、大学の活動の一環として本プロジェクトを遂行していく体制を整えた。また、参加者には傷害保険や看護師損害賠償保険への加入を勧め、希望する場合には、本学教員・学生以外であっても本学を通じて看護専門職の研修補償制度「will & e-kango」へ加入できる環境を整えた。日帰りで参加する者もあれば、2,3日～1週間泊まり込みで参加する者もあり、活動日数は各参加者の都合に合わせて調整した。実際には、いわき市と郡山市に看護師・保健師を1日あたり2名、相馬市については精神看護の看護師1名を派遣した。また相馬市には2011年11月と2012年3月の2回にわたり、1日あたり20数名の看護師、保健師、本学学生を5日間派遣する活動も行った。活動全体をとおしての参加者のべ人数は合計1,075人・日となった。（表3）

また、本学において被災地における活動参加者を対象としたサポートグループを定期的に開催し、精神看護学研究室の教員が中心となって派遣者のメンタルケアを行った。本サポートグループは2011年6月～2012年4月までで計10回開催し、約50人が参加した。

参加者は全員、原則としてボランティアによる参加としたが、東京と現地との間の往復交通費および宿泊費は「きぼうときずな」から全面的な経済支援を受け、かつJR切符と宿泊の手配も「きぼうときずな」事務局で行ったため、参加者の経済的、事務的負担を軽減することができた。また現地での移動には、ペ・ヨンジュン氏寄贈の医療支援車（い

わき市、相馬市、郡山市で各1台稼働)と「きぼうときずな」による現地採用の運転手が担当することで、参加者が被災者支援活動に専念できる体制を整えた。

2. 各地域での活動の実際

1) いわき市

2011年4月末より市の保健師に協力する形で、まずは避難所での看護活動を始めた。避難所には他県からもたくさんの方の支援チームが入っており、どのような支援が必要か手探りしつつ、他チームとの話し合いを繰り返しながら活動にあたった。聖路加チームの名札をつけていると「聖路加の看護師さんですか、この前も聖路加看護大学から来たという看護師さんが親切に話を聞いてくれました。」といった声も聞かれた。被災者に継続的に関わっていくことの必要性が、保健師と本学支援チームメンバーが参加するカンファレンスで確認された。その後、被災沿岸部での家庭訪問と健康調査、また市の一時提供住宅(仮設住宅、民間借上げアパート、雇用促進住宅)の訪問へと活動は移っていった。2011年8月末には避難所はすべて閉鎖され、約1,700世帯が市の一時提供住宅への入居手続きを終了していた。聖路加チームは、大分県や高知県、延岡市などのチームと分担して、入居世帯調査票にそって戸別訪問により聞き取り調査を行った。聞き取り調査の主な項目は、入居日、連絡先、家族構成、健康状態、経済状況、震災の影響(生活や仕事)、交友関係などである。訪問時に不在の家も多く、2巡、3巡と再訪問を実施した。

5~6月の主な活動場所となった体育館の避難所では、風邪、下痢の予防など、集団生活における衛生管理や健康支援対策が重要であったが、9月以降、被災者が仮設住宅に入居した後は、せっかく避難所で形成されたコミュニティの崩壊がおり、仮設地での新たなコミュニティ作り支援も意識しながら訪問を続ける必要があった。戸別訪問で得られた入居世帯調査票のデータをもとに、要継続支援者を保健師と一緒にピックアップした。また、健康障害のリスクが高いと考えられる世帯として、40歳以上の独居男性世帯、高齢の親と独身息子世帯、シングルファーザーまたはシングルマザー世帯を抽出し、継続フォロー対象とした。訪問戸数は2011年5月~2012年3月までで計4,600戸を超えた。(表4)

2) 相馬市

福島県相双地域は福島県浜通りの中北部に位置し、相馬市、南相馬市、広野町、楢葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、新地町及び飯館村が含まれる。2011年3月11日の大震災に伴い、この地域の沿岸部は大きな被害を受けた。また福島原子力発電所の事故により、南相馬市の一部、波江町の一部、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町の一部が警戒区域となり、また飯館村や葛尾村あるいは警戒区域周辺の地域も計画的避難区域や緊急時避難準備区域として設定された。常磐線等の交通機関も不通となった。

相双地域の北部に位置する相馬市および新地町は、1880年代に起きた相馬事件(当時の旧藩主が統合失調症として強制入院させられて、病状に疑いを持った家来が病院から藩主を救い出したという事件)の影響により、震災以前から精神科病院のみならず、精神科クリニックや総合病院の精神科外来が存在しない地域である。相馬市に住む精神疾患患者は、南相馬市の診療所や病院、または常磐線を利用して仙台などの診療所や病院で治療を受けていた。しかし震災によって南相馬市が警戒区域となり、また緊急時避難準備区域に位置する他の病院も6月以降は週2日の診療を行うのみとなったことで、この地域の多くの患者にとって治療継続が困難な状況が発生した。このような精神科医療の空白を埋めるために、福島県立医科大学医学部精神医学講座および同大学看護学部家族看護学部門の有志からなる「こころのケアチーム」が活動を立ち上げ、全国から集まったボランティアの医療職者とともに外来診療や避難所等での診療を開始した。

この「心のケアチーム」に協力するため、本学では精神看護学領域の教員・大学院生・卒業生らの中から毎日ひとりの活動者を確保し、2011年5月7日から8月31日の期間派遣した。1回の派遣日数は5~6日を1クールとし、合計18クール、実日数としては96日(延べ100日)支援活動を行った。実人数15人(延べ18人)が交代で活動にあたった。主な活動内容は、現地の人材や活動者(精神科医師など)のコーディネーターをサポー

トすることであり、ケアチーム内の調整や被災現場とケアチーム間の連絡調整などの役割も担った。さらに、避難所訪問（6月まで）、居宅訪問、仮設住宅への訪問、仮設住宅集会所での活動、職員検診（消防職員等）の補助等も行った。

活動中には繰り返し発生する余震や天候の不順などにも見舞われたが、コーディネーターのサポート以外にも、入院を要する精神症状を持った方の緊急対応を行うなど、活動参加者がそれぞれの専門性を生かし、無事に活動を遂行することができた。また活動参加者は、現地での活動を通し、被災者の心の問題は被災体験からの直接的な影響だけではなく、それまでに潜在していた問題が被災によって顕著化すること、震災・津波・放射能被害等の複雑な問題に対する、より長期的かつ地域に根差した生活再建への支援と心のケアが必要であることなどを学んだ。さらに、活動参加者を対象としたサポートグループに出席し、自分自身もケアを受ける立場となることで、活動参加者本人に対するメンタルケアの必要性和有効性を、当事者として体験し学ぶ機会を得た。

心のケアチームへの精神看護学領域による協力は2011年8月末をもって終了したが、その後本プロジェクトは、11月に実施された「心のケアチーム」による相馬市内の仮設住宅約1,300戸対象の全戸訪問活動に協力した（表5）。また2012年3月には、相馬市保健センターによる「平成23年度仮設等健診を受診された方（幼児～高齢者）」を対象とした健診後のフォローアップ（健康状態や受診状況などの聞き取り、保健指導など）に協力するため、看護師および看護学生のべ109人を派遣し、234戸を訪問した（表6）。

3) 郡山市

巨大避難所（ビッグパレットふくしま）には、原発周辺地域から最高時で約2,500名の住民が避難していた。当プロジェクトは、福島第一原発20キロ圏内にあったために町ごと避難することになった富岡町との間で支援に関する覚書をかわし、富岡町民対象の支援を行うこととなった。活動は、ビッグパレットふくしま内での健康相談に始まり、富岡町保健師の指示のもと、新潟県柏崎市、滋賀県湖南市から派遣されていた保健師チームらと協働しながら、6月からは仮設住宅に住む富岡町民の戸別訪問を行った。訪問対象とした仮設住宅は緑が丘仮設（169戸）、富田町仮設（287戸）、大玉村仮設（630戸）の、計1,086戸であった。戸別訪問では、所定の調査票項目（富岡町での住所、仮設住宅入居日、連絡先、家族構成、健康状態や受診状況、経済状況、震災による生活や仕事への影響、交友関係など）にしたがって聞き取り調査を行った。2011年11月28日以降は、仮設住宅に加え、借上げ住宅の訪問も開始した。不在宅には後日再訪問し、また、健康状態の悪化が危惧されるなど、継続した見守りが必要と判断された者についてはその旨を調査票に記録し、活動参加者が変わっても支援が継続する体制をとった。2011年6月～2012年3月末までで、訪問戸数は計2,670戸となった（表7）。

仮設地では町民からの要望もあり、住民が自主的に参加できる「健康サロン」を2011年7月下旬から開始した。この「健康サロン」は各仮設地の集会所で週1回開催することとし、「お口の体操」や「健康体操」、「脱水予防講座」や「レンジの使い方講座」など、住民からの要望を聞きながら様々なテーマと内容を工夫した。また個別の健康相談や血圧測定なども実施した。この「健康サロン」では、社会福祉協議会から派遣された生活支援相談員や県職員の栄養士らとも協力体制をとった。その後「健康サロン」運営は生活支援相談員と仮設地住民に任せることとし、聖路加チームの活動は、仮設住宅と借上げ住宅の戸別訪問活動に集中する形へと移行した。

なお2011年10月には大玉村仮設地に仮設診療所が開設されたため、診療所医師・看護師とも連携を図りながら、住民の健康支援を行った。

III. 被災者の声

仮設住宅では、それまでは農業を営み、庭付きの家屋に住んでいた被災者からは「こんなウサギ小屋みたいなところにいつまで居ることになるのか」「畑をやっていたが、放射能汚染が今後どう影響するのかわからないので不安だ」、また漁師をしていたという被災者からは「漁の仕事を再開したいが、津波で船も何もかも失った。漁港も壊れているので今は何の見通しも立たない。」「漁を再開できたとしても放射能の影響で売れないだろうから、どうしよ

うもない。今はとりあえずがれき処理の仕事をしているが、それもなくなったときに収入の当てがない。」など、全く違った環境におかれたうえに、仕事を奪われたことや事業再開の目途が立たないことに対する苛立ち、さらに原発事故による放射能汚染の問題から逃れられない現実と苦悩が語られた。

被災者の多くは、仕事や生活環境の変化に伴い運動不足になって足腰が弱くなったり、隣近所と面識がないため孤独で楽しみのない生活を送っているなど、様々な健康障害発生のリスクを抱えていた。実際に「おかずを配ってもらっているが、揚げ物が多い。刺身が食べたい」「妻がいなくなって作るのが大変だから、インスタント食品ばかり食べている」「ついついお酒を飲んでしまう。量は増えた。」といった食生活の変化や、「仕事もないし、ごろごろしている。仮設で運動と言ってもねえ」といった運動不足などから、高血圧や腎機能・肝機能の悪化を健康診断で指摘されている者も多かった。そのような中、聖路加チームのメンバーが訪問すると、お茶を飲みながら30分から1時間近く話をし、「聞いてもらって楽になった」「今度、受診してみる。色々、教えてくれてありがとう」と笑顔を見せる被災者にも大勢出会った。

IV. 活動を通して

本プロジェクトが支援活動を行った2011年4月から2012年3月までの1年間に、避難所間での移動を余儀なくされた後に避難所から仮設住宅や借り上げ住宅への移動を経験した被災者も多く、ほとんどの被災者は、被災という最も厳しい体験の後にさらに、生活環境の激変を体験していた。そのような生活環境の変化に伴い、被災者の健康問題や生活上のニーズも刻々と変化していったため、本プロジェクトのチームは現地保健師とともに常に現状確認を行いながら、あらたなニーズへの対応を相談しつつ、内容や体制を柔軟に変化させて活動した。また、2011年9月以降に他県からの派遣チームが順次撤退した後も本プロジェクトは、被災者支援継続の必要性を認識し、また現地保健師からの要望もあり活動を継続し、2012年4月からは体制を新たに活動する予定である。

なお本プロジェクトの活動は、いわき市、相馬市、郡山市（富岡町）ともに、現地保健師の活動をサポートする形で行った。現地保健師は行政担当者として被災者の健康を守る責任を担う立場にあると同時に、自らも被災者であるという現実と直面していた。支援活動では、被災者でありながらも本来業務遂行のうえに震災に伴う過重な業務負担を負った保健師の立場を十分理解した対応が求められていた。

今後は、運動不足や不健康な食生活による生活習慣病の発生や悪化を予防するための対策、また、仮設住宅や借り上げ住宅での世帯の孤立化を予防し生活圏でのコミュニティづくりを促進するサポートなど、長期化する被災生活に対応した保健師活動をどう支援していくかが本プロジェクトでの新たな課題となると考えられる。また活動継続のためには、持続的な資金確保も重要な課題である。

表1 活動概略

いわき市	いわき市保健所の保健師と協働し、市内避難所における看護活動、被災沿岸部の被災住宅訪問と健康調査を行った。その後、仮設住宅や借り上げアパート・集合住宅、県の特例措置で家賃補助を申請した世帯などの個別訪問による住民の健康チェックを行った。なおこれらの活動は、2011年8月末までは大分県、高知県、延岡市などの行政単位での派遣チームと協力し、作業分担して行ったが、9月以降は当プロジェクトチームだけの活動となった
相馬市	福島県立医大精神看護学教室が携わっていた「心のケアチームのコーディネーター業務（精神科医師のコーディネートなど）」のサポートを行った。また、福島県立医大精神科教授、および精神看護学准教授が中心となって立ち上げた「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」の活動に協力する形で、11月に仮設住宅（相馬市内、約1,300世帯）の全戸訪問のための看護師、保健師などを派遣した。2012年3月には、相馬市保健センター保健師による仮設住宅の訪問活動（健診後のフォローアップ）に協力するため、看護師、保健師を派遣した。
郡山市	富岡町への支援として、富岡町保健師および滋賀県湖南市・新潟県柏崎市からそれぞれ派遣された保健師と協働し、避難所（ビッグパレットふくしま）内での血圧測定・健康相談担当、仮設住宅の戸別訪問による住民の健康チェック、仮設住宅地の集会所における「健康サロン」運営などを行った。滋賀県湖南市からの保健師派遣は8月末で終了し、新潟県柏崎市からの派遣は9月13日で終了したが、本プロジェクトはその後も富岡町への支援を継続し、仮設住宅の戸別訪問による住民の健康チェック、仮設住宅地の集会所における「健康サロン」運営などを行った。2011年11月末以降は、借り上げ住宅に居住する被災者の訪問活動も行った。

表2 参加登録者数（人）

分類	人数
(1) 本学教員	32
(2) 本学大学院生	20
(3) 本学学部生	12
(4) 同窓生	41
(5) 本学認定看護師教育課程修了生（訪問看護）	11
(6) その他	56
合計	172

表3 派遣者のべ人数 (人・日)

月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
いわき市	67	44	60	- ^a	52	43	40	30	24	26	26	412
郡山市	- ^b	10	36	48	38	49	42	31	28	44	34	360
相馬市	24	35	20	19	- ^c	- ^c	96 ^b	0	0	0	109 ^e	303
合計	91	89	116	67	90	92	178	61	52	70	169	1075

a いわき市の都合により活動一時休止

b 6月末より活動開始した

c 8月末で活動一旦終了

d 11/7～12 仮設住宅 1,336 戸の全戸訪問。派遣者には一部、学部生を含む

e 3/25～31 仮設住宅全戸訪問。派遣者には一部、学部生を含む

表4 いわき市 訪問戸数

月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
訪問戸数	690	600	497	0	702	572	553	271	198	278	295	4656
面談件数	319	202	146	0	257	218	819	87	61	75	79	1633

表5 2011年11月 相馬市 訪問戸数

	訪問件数	不在	面談件数	継続要検討	要継続	相談票	市担当へ引継	未訪問
第1日目	382	267	115	6	10	10	-	11
第2日目	380	297	83	1	7	9	4	27
第3日目	352	197	155	9	9	12	2	26
第4日目	222	135	77	4	7	8	0	0
合計	1336	896	430	20	33	39	6	0

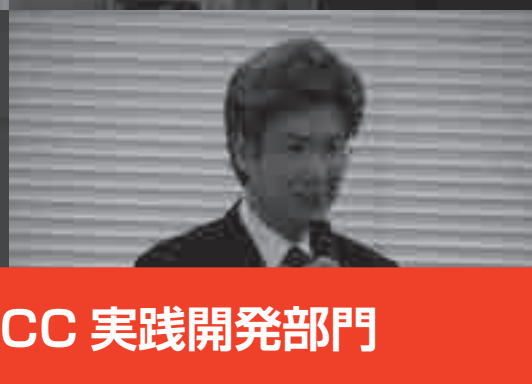
表6 2012年3月 相馬市 訪問戸数

	訪問件数	不在	面談件数	要継続
第1日目	35	14	21	4
第2日目	63	22	41	11
第3日目	65	14	51	4
第4日目	49	12	37	5
第5日目	22	11	11	0
合計	234	73	161	24

表7 郡山市 訪問戸数

月	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
訪問戸数	390	854	250	159	419	179	102	113	117	87	2670





PCC 実践開発部門



【ナースクリニック】

■るかなび（聖路加・テルモ共同研究事業）

事業主：山田 雅子 開催日：8月・年末年始・年度末を除く月～金 10～16時 参加人数：813名

健康ナビスポットるかなびの事業は聖路加・テルモ共同研究事業の一環として活動した。るかなびボランティアは市民ボランティア32名、専門職ボランティア25名、コーディネーター3名、司書1名、運営会議メンバー9名で運用した。

8月・年末年始・年度末を除く月～金の10時～16時まで健康チェック・健康相談・インターネットを使用した情報提供を行い、闘病記・パンフレット類・図書の利用を勧めた。ミニ健康講座・ミニコンサートを10回、ボランティアミーティングを8回、ボランティア全体会議を2回、勉強会5回、運営会議11回、中央区健康福祉まつりへの参加、白楊祭への参加、等地域への広報活動をおこなった。

また、教育の場としても活用され、認定看護師教育課程訪問看護コース研修生17名の実習を受け入れた。闘病記文庫は学部生や大学院生の学習に活用されている。

市民ボランティアが活動に参加するようになり5年が経過し、市民ボランティア主導で勉強会の開催やバザーの開催が行なわれるようになってきている。市民ボランティアが地域の複数のボランティア団体に登録していることも珍しくないため、地域の他ボランティア団体との交流もでき、るかなびを通じて大学スタッフへの講師依頼や他ボランティア団体員がるかなびのボランティア登録することが見受けられた。前年度に続いて、これまで収集してきた闘病記についてコメントをつけたブックリストの作成を市民ボランティアと共に進めている。

また、健康相談においては専門職ボランティアに歯科衛生士が参加し、さまざまな健康相談に対応できるようになった。

■赤ちゃんがやってくる

事業主：片岡 弥恵子 開催日：8回/年 参加人数：75家族

「あかちゃんがやってくる」は、新しく子どもが生まれる家族、特に兄姉になる子どもたちに対して、「あかちゃんが生まれるってどういうこと?」「なぜ、あかちゃんが生まれるの?」「あかちゃんとは?」などについて学習し、新しく家族を迎えるための準備クラスである。兄姉になる子どもたちが、新しい生命の誕生を通じて、自分の生・性を大切にすることができるよう働きかけると同時に、母親や父親が、今後子どもたちと性に関する話ができるきっかけとなっている。

■ルカ子母乳育児相談室

事業主：堀内 成子 開催日：来所；月・水・金 訪問；随時 参加人数：152名

聖路加産科クリニックに開催場所を移転して2年目になり、スタッフ間の情報交換も時折行った。ルカ子母乳相談室の最も大きな特徴は、訪問による相談を受けていることである。小さな子供を抱えての外出は大変なので、訪問による相談のニーズは根強い。開催場所の聖路加産科クリニックでも母乳相談を行っているが、訪問での相談が望ましい場合は、ルカ子母乳相談室を勧めたりすることもあった。

対象は生後数日から1年位までの子どもとその母親で、約半数は中央区在住で、隣接している港区、江東区からの利用者も多い。相談内容は、母乳に関することだけでなく育児全般にわたっているが、卒乳・断乳が最も多く、母乳不足感、乳房のトラブル、離乳食などである。体重増加、母乳の分泌、母親の意向などに合わせて授乳の方法のアドバイスをするが、母親が不安に思っているほど問題が無いことも多い。母乳も子どもも順調に経過していることを伝えると、来院時は不安そうにしていた母親が、笑顔になって帰っていくこともある。また、地域の特性として、ワーキングマザーが多いため、仕事に復帰する前に授乳をどのようにしていくかなどの相談も多い。

■ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ（聖路加・テルモ共同研究事業）

事業主：森 明子 開催日：6回/年 参加人数：延べ47名

今年度も過年度と同様に「子宮筋腫・内膜症」「不育症」「不妊症」「出生前検査」をテーマに6回開催した。開催形式は医療者によるミニ講座と自助グループメンバーの体験談および交流会としているが、「出生前検査」の会では遺伝診療に携わる産婦人科医と看護師からの講義を中心とした。

看護ネットや妊娠出産情報関連のメーリングリストを中心に広報活動を行い、のべ参加者数は47名であった。参加者の多くは30～40代の会社員女性であったが、このテーマに興味を持つ大学院生、「不妊症」の会ではパー

トナーである男性も参加した。参加後のアンケートではほぼ全員が「また参加したい」と回答しており、「とても勉強になった」との自由回答も多くみられた。「不妊症」の会は認定看護師教育課程の研修生が演習として2グループに分かれて企画から評価までを行った。参加者にも好評であったことから、本事業の目的は達成できたといえる。

しかし、例年、参加者募集の広報、参加者の確保に苦慮しており、2012年度は「ルカ子ウィメンズヘルス・カフェ」を一旦休止し、2013年度以降に再開を検討したい。

■乳がん女性のためのサポートプログラム（聖路加・テルモ共同研究事業）

事業主：大坂 和可子 開催日：9回/年 参加人数：413名

2011年度は個々の体験を分かち合う話し合いを7回、乳がんに関する学習会を2回、合わせて9回のサポートプログラムを開催した。体験を分かち合う話し合いでは、サポートプログラムの参加が初めて～5,6回目ぐらいの方のグループと何度も参加している方のグループ構成や、治療と生活、ホルモン療法など個々の治療内容を踏まえて共通する悩みが分かち合えるグループ構成を試みた。また、体験者共通のテーマである「気持ちの持ち方について」を設け、体験者が自分の関心にあわせて話し合いに参加できるよう工夫した。学習会では乳がん認定看護師の高橋由美子氏（国立がんセンター中央病院）による「リンパ浮腫とセルフケア」の講義、医師尹 玲花氏（聖路加国際病院乳腺外科）による「乳がんサバイバーシップ」の講義を行った。本プログラムは、参加者の有志メンバーが運営に参与する形をとり協働している。メンバーから出されたアイディアによりサポートプログラムの出張的役割を果たす「聖路加スマイルコミュニティ」を2008年から開始しているが、今年度はより多くの方に利用してもらえよう2011年10月より聖路加国際病院プレストセンタースタッフの協力のもと病院内での活動を開始し、ボランティアメンバーが自ら組織作りに取り組んだ。

<業績>

平成23年度日本がん看護学会学術奨励賞（教育・実践部門）受賞

■子どもの健康、知ろう、考えよう（聖路加・テルモ共同研究事業）

事業主：及川 郁子 開催日：5回/年 参加人数：151名

2011年度は5回実施した。テーマは、6月「良い歯をめざそう！子どもの歯の健康」、7月「子どもの事故と応急処置・救急蘇生法」演習付き、9月「子どもとのアレルギーについて」11月「子どもにかかりやすい病気と薬・予防接種」、1月「子どもとの関わりかたのコツ」である。子どもたちの健康問題や季節に合わせ、専門の講師を招いて講義を60分～90分程度行い、その後参加者との質疑応答を通しての交流を図っている。ここ数年、家族の希望もあり、内容が一定化してきている。

参加者は中央区在住・在勤である。夕方の2時間であるが、託児を行っていることも影響してか、親子の参加、リピーターが増えてきている。参加者の意見交換は活発であり、さながら親の相談会のような雰囲気になることもある。子育て中の親の参加が多いことから、育児に悩んだり、困ったりしていることも伺え、育児不安解消の一端を担っているともいえる。

参加者のアンケートからは、学習内容のわかりやすさ、講師や参加者が身近に話せて堅苦しくないこと、運営や全体の雰囲気がいよことなど、肯定的評価が挙げられている。

回数を重ねるごとに託児利用の希望が増えて、断っている状況である。多くの参加者の要望に応えたいが、リスク管理等の問題もあり、今後も検討課題である。

■天使の保護者ルカの会（聖路加・テルモ共同研究事業）

事業主：堀内 成子 開催日：8回/年 参加人数：50名

2011年度は計8回のセルフヘルプ・ミーティング、及び株式会社テルモからの資金援助により、「カラーセラピー」と「エンジェルキルト」の2つのイベントを開催した。また、今年は初めて、体験者スタッフが中心となって企画した「想いをかたちにする会」を実施した。これは亡くなった子どものことを想いながら紙粘土で自由にオブジェを作る会であるが、子どものためにおもちゃや花など思い思いのものを簡単に手作りできると好評であった。

今年の傾向として、子どもを亡くして比較的早い時期に参加する両親が多かったが、毎年定期的に参加するイベントには子どもを亡くしてから年単位の時間が経過したリピーターの方も参加するため、体験者の中でいたわりあう場面も多くみられた。また、継続して参加していた男性より体験者スタッフになりたいと申し出があり、今年からスタッフ研修を行っているが、夫婦での参加が増えている中、男性スタッフの存在は重要なものとなっている。

これまでの病院研修や学会、教育プログラム等での講演を通して、施設内の医療者には本事業の存在が知られ、紹介も多くなってきている。しかし、長いグリーフの期間を一人で過ごしている方も未だ多く、地域でのケアの拡充を図るため、今後は地域で子どもを亡くした両親に出会う機会のある医療者に向けた情報の発信も行っていく予定である。

<業績>

堀内成子, 石井慶子, 太田尚子, 蛭田明子, 堀内祥子, 有森直子. 周産期喪失を経験した家族を支えるグリーフケア: 小冊子と天使キットの評価, 日本助産学会誌, 25 (1), 13-26, 2011

■リンパ浮腫ケアステーション

事業主: 大畑 美里 開催日: 毎週火曜日 参加人数: 211 名

本ステーションでは、リンパ浮腫を持つがん体験者を対象に、個別指導としてリンパドレナージ等のケアの提供や、自宅でのケアが継続できるようにセルフケア指導を行い、また、乳がん術後で症状が軽症、リンパ浮腫の予防が必要な方を対象に、リンパ浮腫予防や早期発見のためのセルフケアグループ指導を行った。7月には、臨床看護師やそのほか医療職種を対象にリンパ浮腫ケアに関する知識や技術の向上を目的に、研修会を開催し、リンパ浮腫の基礎知識、セルフケア指導に関する講義・演習を行った。また、本ケアステーションの運営に携わる2名が、日本医療リンパドレナージ協会主催の医療リンパドレナージセラピスト養成講習会に参加し、中級セラピスト資格を取得した。さらにリンパ浮腫ケアの質を高めるため、引き続き活動を継続する予定である。

<業績>

大畑美里, 本田晶子, 中曾根朋子, 井上貴久美, 金井久子, 細川恵子, 佐藤佳代子, 米原恵理子, 矢ヶ崎香, 小松浩子. 聖路加看護大学看護実践開発研究センターにおけるリンパ浮腫ケアステーションの活動. 第26回日本がん看護学会学術集会口演発表. (査読あり). 2012.2. 島根

■多世代交流型デイプログラム 聖路加 和みの会 (聖路加・テルモ共同研究事業)

事業主: 亀井 智子 開催日: 毎週金曜日 参加人数: のべ752名

2007年4月に本プログラムを創設し、5年間が経過した。PCCによる高齢者と子どもを中心としたプログラム開発を行い、週1回継続的に看護教員が運営した。

登録高齢者は12名、小学生は6名である。また運営には地域ボランティア4名の協力を得た。プログラムに参加した高齢者への効果は、特に初回参加時にうつ傾向のある高齢者のうつの軽減、および穏やかな表情への変化、認知症高齢者と他者・他世代との交流による会話の質の向上などが確認された。小学生は高齢者への思いやりなどが生じている事が確認され、両者の満足度は高かった。

6月18日には第26回日本老年精神医学会との共催によりピーターホワイトハウス氏、朝田隆氏を迎えて「少子高齢社会における新たなケアの挑戦－世代間交流プログラムの可能性－」を本学で開催した。70名が参加し、世代間交流を取り入れたケアについて討議を行った。

<業績>

Tomoko Kamei, Yuko Yamamoto and Fumiko Kajii: Changes in the depression status of elderly following participation in an intergenerational day program over two years in a Japanese Urban Community, The 9th international conference of the global network of WHO collaborating centers, abstract accept, 2012.

■転倒骨折予防実践講座 (聖路加・テルモ共同研究事業)

事業主: 亀井 智子 開催日: 6回/年 参加人数: 130名

1回目: 問診、心身の計測 (BMI、開眼片足立ち時間、骨密度、大腿周囲計長、10m 歩行時間、QOL26)、

転倒リスクアセスメント、小講義「高齢者の転倒の疫学」、運動プログラム、運動カレンダーの配布

2回目: 問診、小講義「高齢者の食事と栄養」、運動プログラム、運動カレンダー記載の確認

3回目: 問診、小講義「自宅の安全対策」(介入群)、小講義「老化と健康」(対照群)、運動プログラム、運動カレンダー記載の確認

4回目: 問診、小講義「足の手入れ」、運動プログラム、茶話会、運動カレンダー記載の確認、修了証授与

5回目 (12 週後フォローアップ講座): 問診、心身の計測、運動プログラム、運動カレンダー記載の確認、茶話会

6回目 (54 週後フォローアップ講座): 問診、心身の計測、運動プログラム、運動カレンダー記載の確認、茶話会

自宅の安全対策の教育を受けた介入群は、受けなかった対照群と比較して、12 週後の自宅の環境整備に関する知識量が多く、転倒発生者の割合が有意に低かった。本プログラムは自宅内の安全知識の向上、および短期転倒予防に効果があることが示唆された。

<業績>

2011 年 6 月日本老年看護学会研究論文優秀賞受賞（亀井智子、梶井文子、糸井和佳、小坂井留美、新野直明：地域在住高齢者を対象とした Home Hazard Modification Program の効果、日本老年看護学会誌、14(2)、2010）

■認知症の人のご家族のためのリフレッシュ・プログラム

事業主：梶井 文子 開催日：8 回 / 年 参加人数：30 名

上記の開催日に、ミニレクチャー（30 分）、リフレッシュ・プログラム（30～40 分）、話し合い（30～40 分）を行った。また、参加者のニーズに合わせて時間外に個別の電話相談等も行った。

●ミニレクチャー内容：認知症の理解（病気と症状）、認知症の人への接し方、認知症の人にとってのライフレビュー、認知症の人と家族のためのメモリーブック、多世代交流と認知症ケア、在宅サービス・施設サービスの上手な活用の仕方

●リフレッシュ・プログラム内容：アートセラピー（ガラスのアクセサリーづくり）、アロマセラピーハンドマッサージ、フットケア・マッサージ等

●話し合いのテーマ：日頃の介護で困っていること、日常生活の介護の工夫、皆に活用してもらいたい情報等

参加家族の希望は、認知症やケアに関する多くの知識や情報を得ることや、他の家族・介護者と介護についての情報交換をすること、気晴らしとなる活動に参加できるなどの希望が高かった。さらに、家族・介護者が日頃の介護生活から離れて気晴らしとなる活動に参加することは、精神的健康の側面から非常に重要であると考えられた。

<業績>

梶井文子、山本由子、亀井智子：認知症家族介護者プログラム参加者の在宅ケアとサービス利用に関する支援ニーズ、第 16 回日本在宅ケア学会学術集会（2012 年 3 月 17 日開催）

■在宅酸素療法を行う方へのテレナーシング

事業主：亀井 智子 開催日：のべ 271 日間 / 年 参加人数：2 名

上記 2 名を含む COPD HOT 実施者 41 名を対象として、介入群 21 名と対照群 20 名に無作為に割り付け、在宅モニタリングに基づくテレナーシングを介入群にのみ 90 日間提供し、従来の診療のみを受ける対照群と急性増悪、及び再入院率を比較し、効果を検討した。その結果、TN 期間中の急性増悪発症率は介入群 20%、対照群 52.9%、再入院者割合は介入群 20%、対照群 23.5%で、介入群の急性増悪発症率のみ有意に低かった（RR = 0.378, 95% CI = 0.14～0.94, ARR = 0.329, 95% CI = 0.02～0.56）。また、発症回数は介入群のみ有意に低下した（ $p = 0.02$ ）。生存分析（Kaplan-Meier 法）では、急性増悪について両群間に差が認められた（ $p = 0.03$ ）。これらのことにより、在宅モニタリングに基づくテレナーシングは COPD HOT 実施者の急性増悪発症予防、および発症回数を低下させる可能性があることが示唆された。

・亀井智子、山本由子、梶井文子、中山優季、亀井延明：COPD 在宅酸素療法実施者への在宅モニタリングに基づくテレナーシング実践の急性増悪および再入院予防効果—ランダム化比較試験による看護技術評価—、日本看護科学会誌、31 (2)、24-33、2011.

・亀井智子、山本由子、梶井文子、中山優季、亀井延明、穴田幸雄、辻洋介、相羽大輔：COPD IV 期の在宅酸素療法患者を対象としたテレナーシング実践 - トリガーポイントによる在宅モニタリングデータの比較 -、日本遠隔医療学会誌、7(2)、179-182、2011.(日本遠隔医療学会優秀論文賞受賞)

・亀井智子、山本由子、中山優季、蝶名林直彦、西村直樹、辻洋介：COPD HOT 患者の在宅モニタリングに基づくテレナーシングの急性増悪と QOL 改善効果：ランダム化比較試験、第 21 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会、2011.

・亀井智子、山本由子、梶井文子、中山優季、穴田幸雄：慢性閉塞性肺疾患在宅酸素療法 (COPD HOT) 患者への在宅モニタリングにもとづくテレナーシングの急性増悪発症に関する費用対効果：ランダム化比較試験、第 16 回日本在宅ケア学会学術集会、162、2012.

■高齢者のご家族へオンリーワンの「^{メモリーブック}思い出帳」作りプロジェクト

事業主：山本 由子 開催日：毎月第 1、3 土曜日ほか対象者の都合により開催 参加人数：7 組 14 名

本年度は、研究の趣旨に協力が得られた介護支援専門員の紹介による認知症高齢者とその介護者も含めて行った。老夫婦や、介護者が仕事を持つ場合など、高齢者の認知症状に気付きながらも家の外に出る機会が減少していく実態がうかがえた。

個別のライフレビューセッションによりメモリーブックを作成し、普段に手にし、見て語ることで、「家族や来客に熱心に語る」「昔の習慣を思い出す」「写真に写っている人を思い出して気にかける」「夫婦で穏やかな時間を過ごせる」など利用されているところである。介護者や介護支援専門員からは「最近のことはすぐ忘れてしまうが、メモリーブックのことは覚えている」「他の人と話したがっていることがわかった」「忘れていたようにも写真がきっかけで思い出せることがわかった」等、肯定的な意見が聞かれ、今後さらに症例を増やし検討して行きたいと考える。

＜業績＞

山本由子、亀井智子、梶井文子（聖路加看護大学）ライフレビューによる認知症高齢者の自己肯定感表出と介護者の意識変化－3組の認知症高齢者と介護者へのメモリーブック作成過程を通して－。日本老年看護学会第16回学術集会示説発表。（査読あり）。2011.6. 新宿。

山本由子、亀井智子、梶井文子（聖路加看護大学）在宅認知高齢者へのライフレビューセッションによるメモリーブック作成とうつ、周辺症状の変化。第16回日本在宅ケア学会学術集会示説発表。（査読あり）。2012.3. 九段下。

【市民健康講座】

■保護者・支援者のための予防接種講座

事業主：堀 成美 開催日：3 回／年 参加人数：20 名

近年、乳幼児期に接種するワクチンの数が増え、出産後の多忙な時期に保護者が最新情報にアクセスし、予防接種の計画をたてることに課題が生じていることから、本講座では、これから妊娠／出産をむかえるカップルや、支援を行う関係者を対象に、「予防接種／ワクチンの基本」「スケジュールのたてかた、修正のしかた」「記録の重要性と赤ちゃん期以降のワクチン」の3構成で、少人数／双方向性のセミナーを開催。予防接種についての準備、今おきている問題の解決法、こどもが自立する時期に向けての準備を参加者で共有した。

参加者には、事後もメール等での個別相談に対応。男性（父親）の参加者もあり、今後はより参加しやすい曜日や時間について改善を予定。

■家で死ねるまちづくり「はじめの一步の会」

事業主：山田 雅子 開催日：定例会 1 回／月・活動随時 参加人数：26 名

はじめの一步の会では一人暮らしあるいは日中独居となる高齢の方などへの訪問をボランティアとして行っている。会員であるケアマネジャーからの依頼を受け、散歩の付き添い、話し相手、図書館への同行、看取りのサポートなど相手のニーズに応じてさまざまな支援を行ってきた。

これからの人口の高齢化、特に中央区では高層マンションの単身世帯が増えていることを受け、住民同士でのネットワークの形成と、一人で生きていくことに必要な勉強会などを実施した。今年度研修で取り上げたテーマは、「聖路加看護大学福島県災害支援プロジェクト」、「成年後見制度ミニ研修」、「エンディングノートについて」であった。

本会の課題である多くの人に活動を知ってもらうことを目指し、利用者向けパンフレットの検討、中央区の子どもとためす環境まつりへの参加、「はじめの一步の会 活動報告と互いに語り合う会」開催など積極的に取り組んだ。

子どもとためす環境まつりでは「語り継ぐ江戸時代のエコ生活」と題し、子どもとの交流を図り、活動の周知を図った。3月24日に実施した「語り合う会」は、重い身体障害を負いながら一人で生活されている当事者を招き、2号館ぼるかるームで開催した。その中で、「活動は運動にしていくことが重要」、「次世代にバトンをつなげよう」、「中央区民から発信しよう」といったキーワードが出され、産・学・民・行政が協力してやるべきことを実施し、続けていくことの重要性を共有することができ、今後の本会の活動に繋がるいくつかの提案もなされた。

■中央区民カレッジ まなびのコース

事業主：山田 雅子 参加人数：のべ 250 名

前期、後期ともに水曜日の 18 時 30 分～20 時に、看護実践開発研究センター「ぼるかるーム」および「交流ラウンジ」

にて実施した。前期は「助け合い支えあって、よりよく生きる！」を、また後期は「命を見つめて、健やかに生きる！」をテーマに、限りある命を慈しみ互いに支えあって生きること、またヘルスプロモーションの考え方について学ぶとともに、人間らしい死を迎えるとはどういうことかについて考えた。“命の声をきく” ヨーガも2回行った。前期では「かかりつけ看護師を持とう - まちのナースステーション」と題した新しい講義を取り入れ、病院の中や訪問看護ステーションだけでなく、街の中で日常生活に根ざした看護師活動の実践の話聞いた。受講者からは、ヘルスプロモーションに関して「新しい視点を学ぶことが出来た」、また訪問看護事業所（ナースステーション）について「利用してみたい、あれば安心できると思う」などの感想が聞かれた。なお前期・後期とも、5回コースのうちの1回で、講義後に講師を交えた茶話会を開催し、参加者間での自由な意見交換や情報共有も行われた。各クラスの内容と講師は以下のとおりであった。

6/1	地域に支えられて生きるー在宅医療の現場から	講師	田代真理（聖路加看護大学）
6/15	かかりつけ看護師を持とうー まちのナースステーション	講師	福田裕子（まちのナースステーション八千代）
6/29	自分を愛し、人を愛すー のりっち、なおっちの健康講座	講師	島内憲夫（順天堂大学）、 大久保菜穂子（順天堂大学）
7/13, 7/27	自分のからだを知ろうー 命の声をきくヨーガ	講師	花村睦（ハタ・ヨーガ）
10/12	命を慈しみ、支えあって生きるー のりっち、なおっちの健康講座	講師	島内憲夫（順天堂大学）、 大久保菜穂子（順天堂大学）
10/26	健やかに生き、安らかに逝くー命の終焉を看取る	講師	塩塚優子（青梅慶友病院）
11/9	賢く見つけようー 患者の立場でさがす医療と介護の情報	講師	石川道子（聖路加健康ナビスポット）
11/30, 12/8	自分のからだを知ろうー命の声をきくヨーガ	講師	花村睦（ハタ・ヨーガ）

■中央区民カレッジ シニアコース

事業主：山田 雅子： 参加人数：のべ250名

10月4日～12月13日の期間の火曜日、午後2時～4時に、「シニアの健康 1,2,3 健やかに老いるために」と題して10回のクラスを築地社会教育会館において実施した。第1回の「感染症にならないために」は今年度新たに追加した講義であるが、高齢者に関連したインフルエンザワクチンや肺炎球菌ワクチンに関する質問が多く出された。第8回の「自分らしく過すためのストレスマネジメント」では、講義でストレスに関する基本的知識を共有したのちに、数人のグループに分かれてのグループワークも行い、参加者どうしで日々のストレス解消法を語り合った。

各クラスの内容と講師は以下のとおりであった。

10/4	感染症にならないために	講師	堀成美（聖路加看護大学）
10/11	めざせ快便 さわやか習慣	講師	沼田美幸（日本看護協会）
10/18	妊娠、出産、不妊を理解する	講師	實崎美奈（聖路加看護大学）
11/1	愛する人との別れに備える	講師	押川真喜子（聖路加国際病院）
11/8	笑って、笑って 免疫力を高める	講師	福田裕子（まちのナースステーション八千代）
11/15	上手に対応 おしっこトラブル	講師	谷口珠実（第一医院）
11/22	シニアのスキンケア	講師	南由起子（埼玉社会保険病院）
11/29	自分らしく過すためのストレスマネジメント	講師	高橋恵子（聖路加看護大学）
12/6	介護が必要になったら	講師	田代真理（聖路加看護大学）
12/13	お薬と上手につき合う	講師	八重ゆかり（聖路加看護大学）

■聖路加市民アカデミー（聖路加・テルモ共同研究事業）

事業主：高橋 恵子 開催日：10/21 参加人数：346名

今年度の聖路加市民アカデミーは、「みんなで作る、まちの医療 ～行動を起こした市民に聞く～」をメインテーマとし、多くの人々が不安に感じている将来の医療と介護の考え方について、今最も輝いている講師の先生をお招きし、参加者の皆さんと一緒に考えていく機会を提供した。プログラム内容は、1) 日野原重明先生（聖路加国際病院理事長、聖路加看護学園理事長）による特別講演「100歳を迎えて、今、考えること」、2) 藤原瑠美氏（ホ

スピタリティ☆プラネット主宰)による講演-I「医療からケアへ～スウェーデンの高齢者ケアから見えてくること～」、3)馬庭恭子氏(広島市議会議員 地域看護専門看護師)による講演-II「市民と築くまちづくり～看護師、患者、市議会議員の経験から考えること～」、さらに、4)横山裕子氏(正派音楽院卒業、同研究科修了)による美しい20弦箏曲演奏で、心も癒され幕を閉じた。平日にもかかわらず、会場は300名の定員を超えるほどの大盛況だった。

参加者のアンケート結果では、83.7%が女性で、年代は10代から80代の幅にみられたが、76.2%が60歳以上であった。また、「日野原先生に元気をいただいた」「日野原先生のあたたかい話に感動した」「心が癒され、励まされる講演会だった」「自分で考えても難しい話を聞かせてもらい頑張りたいという気持ちわいた」「徐々に迎える高齢、死、物事一つ一つを考え、意見を持つことの大切さを感じた」等の感想が寄せられた。さらに、「ミニコンサートで心が癒された」と90%以上の方が、必ずミニコンサートを入れてほしいと回答していた。今年度のアンケート結果を参考に、次年度の企画を検討していきたいと考えている。

■聖路加・テルモ新健康カレッジセミナー(聖路加・テルモ共同研究事業)

事業主:高橋 恵子 開催日:10/29、11/19、1/14 参加人数:150名

新健康カレッジセミナー2011では、メインテーマを「知って付き合う、自分のカラダ!」と題し、一般市民が自分らしい生活を送るために、自分の身体を知って付き合い、今自分にできる健康生活を一緒に考える機会を提供した。カレッジセミナーは、[講座I]門伝昌己先生(聖路加国際病院 内分泌代謝科医長)による「なぜ糖尿病が怖いのか?」、[講座II]西裕太郎先生(聖路加国際病院 循環器内科医長)による「なぜ高血圧が怖いのか?」、[講座III]青柳幸利先生(東京都健康長寿医療センター研究所)による「効果的な運動の鍵は?健康を維持するのに必要な活動量」という内容で開催した。

参加者のアンケート結果では、6割以上が女性で、8割以上が60代の参加であった。「糖尿病にならないよう歩くようにして健康に心掛けたい」「食事や運動の大切さを認識させられた」「生活習慣を見直して自分なりの運動を考えて実行したい」「血圧について分かりやすく講義していただき参考になった」「効果的な運動 とても良いテーマで魅力的で大変良かった」等の自分自身の生活習慣の振り返りや、今後の健康生活への役立ちとしての前向きな感想がみられた。また、今後もこのような講座を続けてほしいとの感想も寄せられた。来年度も参加者のアンケート結果を参考に、市民のニーズに沿った企画を検討していきたいと考えている。

【WHO看護協力開発センター事務局】

■国際保健協力看護・助産職人材の継続的確保に関する研究:国際看護・助産専門職キャリアモデル開発

主催者:田代 順子

今日、グローバルな健康格差是正への貢献ができる看護・助産領域の国際協力人材育成は大学院の国際看護学・助産学コースとして始まり、修了生は既に海外で様々な経験を積んでいる。しかしながら、帰国した後の更なる海外医療協力能力のキャリア開発へのスムーズな移行に困難を抱えている。本研究の目的は、看護・助産の国際協働人材の継続的確保に資するために、国際看護・助産協力の中堅専門家のキャリア開発のニーズと国際医療協力機関の人材確保ニーズを記述し、我が国の国際保健への継続的貢献ができるPost MasterあるいはDoctorのキャリアパス開発モデルを示していくことである。質問調査から、国際協働能力を持つ看護・助産人材を中堅専門家にスムーズに移行させていくには、若手時代に海外実践力を視野に入れた大学院での能力育成が必要である。また、看護・助産人材の多くが女性であり、結婚・出産、また日本での教職と国際協力が両立できるキャリア支援対策が必要であると考えられる。2011年の看護系大学は201校、大学院131と増え、その中で162校(76%)が国際看護学を開講、大学院も43専攻と増加した。看護系大学の国際看護・助産の教員としてあるいは研究者として籍を置きながら、海外の高等教育機関との連携のもとで国際看護・助産の研究あるいはプロジェクト開発に携わり、国際人材としてキャリアをアップしてゆけるシステムが必要である。研究成果:新福洋子、田代順子、長松康子、小黒道子、眞鍋裕紀子「経験した国際看護学・助産学修士修了者のキャリアパスモデル開発を目的とした、国際協力・協働で養った能力・ニーズ調査」第26回日本国際保健医療学会学術大会、2011。



キャリア開発支援部門



【ナーススキルアップ講座】

■看護管理コンサルテーション

事業主：井部 俊子 開催日：随時 参加人数：1名

聖路加看護大学「看護実践開発研究センター催しもの案内」や、2011年度認定看護管理者ファーストレベル講習の修了時および大学院のクラスなどにおいて、「看護管理コンサルテーション」の活用をPRした。

その結果、2011年度は1名が看護管理コンサルテーションを利用した。

テーマは以下の通りであった。

- ① トップダウン型組織の変革をどのように行っていったらよいか？
- ② 感情的な反応を示す部下への対応

■緩和ケアコンサルテーション

事業主：林 直子 開催日：予約制 参加人数：1名

ケーススタディについてのアドバイスや指導、緩和ケアチームの立ち上げやキャリアアップに関する相談を随時、個別に受け、相談者のニーズに応じた問題解決に向けた支援を行った。今年度は、1件であった。今後も引き続き、がん緩和ケアに携わる看護者に本事業を活用してもらえよう、継続して取り組んでいく予定である。

■在宅看護コンサルテーション

事業主：山田 雅子 開催日：予約制 参加人数：2名

センター事業のひとつである「退院調整看護師養成プログラムと活動支援」に参加する予定の看護師が2名コンサルテーションを利用した。

退院調整看護師は、院内に1名しか配置されていないことが多く、ロールモデルのない中、日々の業務を模索しながら実施している。そこで起きているさまざまな課題を本プログラムの中で語りながら、自分の立つべき組織内での位置付けや役割の取り方について一定の方向性を見出すことができていた。その結果を持って、上記「退院調整看護師養成プログラムと活動支援」に参加したことで効果的に学習することができていたようだ。

■看護教育コンサルテーション

事業主：松谷 美和子 開催日：予約制 参加人数：0名

今年度の相談者は、看護研究の相談をしたいという問い合わせのみであった。趣旨が異なることから実施を見送った経緯があった。次年度からは、看護研究コンサルテーションを開設する。

■語り合おう！看護マネジメント 看護管理者のための‘サポートグループ’

事業主：井部 俊子 開催日：5回／年 参加人数：63名

毎回、日々の看護管理で困っていることや悩んでいることについて参加者の一人が相談するという形で始めた。参加者と主催者／運営関係者が、ディスカッションを通して状況に潜む看護管理の課題を明確にし、課題への対処方法について検討を行なった。

本事業は、認定看護管理者ファーストレベル講習会の開催期間中に開催したことから、参加者の多くが、ファーストレベル講習会の受講生であり、経験と理論を結びつけながら看護管理上の問題の検討を行なった。

事例の提供者からは、課題の解決が図れた、自己の看護管理者としての姿勢や価値観に気づかされたとの意見が聞かれたほか、参加者からも自己の組織における課題に置き換えて検討することができたとの声が寄せられた。

■退院調整看護師養成プログラムと活動支援

事業主：山田 雅子 開催日：1コース（5回）/年 参加人数：41名

近年、入院期間の短縮に伴い、在宅医療が推進され、入院から在宅への継続した医療提供体制の整備が早急の課題となっている。特定の相談窓口を設け、退院調整看護師を専任で配置する病院施設も増加している。しかし、退院調整システム構築の十分なノウハウは、十分に浸透しているとは言えない状況にある。そこで、病院において退院調整を専任で行っている看護師を対象に、5回シリーズの参加型講習のプログラムを組み、活動支援を行った。今年で4年目となるが、昨年に続き、定員を上回る申し込みがあった。

内容は、退院調整における保健医療情勢、関連する診療報酬、倫理的ジレンマ、他職種連携などを取り上げた。これらの内容について講義やグループワーク、ロールプレイを通して理解を深め、最終日には地域完結型医療提供体制を組織するための方法について考え、各自が自施設における課題を見出すに至った。講義に対して参加者からは、「同じ悩みを持っている仲間と語り合うことで力づけられた」「あの施設での取り組みを自分のところでも取り入れてみたい」といった声があった。今年度は対象を専任で活動を行っている者と限定したため、参加者が同じ問題意識や課題に向かってグループワークすることができた。今後も、プログラムの継続と、研修生同士の交流をさらに深められるような取り組みを行っていきたい。

■精神看護事例検討会

事業主：萱間 真美 開催日：4回/年 参加人数：89名

精神科領域の疾患や状態にある人への看護師・保健師の関わり方について、実際の事例をもとに、話し、学びあい、支えあう場を作ることを目的とし、精神科アウトリーチ支援を実践する多職種を対象とした精神訪問看護事例検討会と、精神看護専門看護師を対象とした事例検討会を定期的に実施している。

訪問看護師は、地域で生活する精神障害を有する人へ様々なケアを提供しているが、精神障害の程度や内容は多岐に渡り、ケアを提供していく上で困難を感じることもある。また訪問看護は対象者の生活の場に赴き看護を提供するため、その場での判断を求められることが多く、対応に苦慮したり、今後の見通しを持ちにくくなることもある。これらの困難や不安について、同じ立場である訪問看護師や、保健師、クリニックの看護師等が、共に考え、支えあうことのできる事例検討を行っている。またこの会には、訪問看護ステーション、医療機関、行政、福祉職（精神保健福祉士）も参加しており、他職種とのコミュニケーションのとり方について互いにアドバイスをする場になっている。

専門看護師の場合も同様に、病棟看護師が対応に苦慮している患者に対し、直接的な支援と間接的な支援をどのように行えばよいかなど、同じ立場の専門看護師同士が共に考え、支えあうことのできる事例検討を行っている。

本年度は東日本大震災後の影響もあり5月の開催を中止したが、いずれの事例検討会も来年度も継続して実施予定である。

■がん看護事例検討会

事業主：本田 晶子 開催日：3回/年 参加人数：5名延べ13名

今年度は、参加者全員が教育課程を修了したがん看護専門看護師資格取得をめざす候補生であった。1回につき2時間、各自が事例を持ち寄り、日頃の実践における疑問や問題について話し合い、がん看護専門看護師に必要な能力の向上を目指して、様々な観点から検討し、共有を図った。

参加者は、事例検討会を通して、プレゼンテーションや意見交換するスキルを養うと共に、がん看護についての専門性を深めることで、日本看護協会の専門看護師認定審査の合格を果たすことができた。また、自身の活動や看護実践に関する互いの近況を共有するなど、ピアサポートの場としても機能していたと考えられる。

■英文献を読もうパートⅠ～基礎編～

事業主：園城寺 康子 開催日：前期 5 回、後期 5 回 参加人数：9 名

テキストは『看護英語読解 15 のポイント』メジカルビュー社を使用。各回 1Unit を説明解説し、補助教材として Time や Asahi Weekly などから選んだ他の医療系教材も適宜使用した。特に複雑な構文の理解を目指し、訳読や解説をし、受講者の英語力の強化を主眼としたものである。また、基本的な英語の学習法に関しては、直読直解や音読など、実践的学習方法も紹介した。医療系の文献の特徴だけではなく、基本的文法に留意した正確な内容把握を中心に授業を展開したが、今回は大学院の入学試験に英作文が必要な場合や、論文作成のため英作文への希望もあり、配慮して取り入れた。＜英文献を読もう！＞パートⅡへの導入となるように配慮した。また、受験志望者も参加していたので、修士課程の試験問題の一般的傾向の分析やその対策なども加味した。受講者は年齢、専攻分野など様々であったが、非常に真剣に取り組んでおり、それが相互に刺激になり、それなりの効果はあったが、もう少し回数を多くしてほしいという希望もあった。

■英文献を読もうパートⅡ～構文理解強化コース～

事業主：田代 順子 開催日：7～8月に5回、1月に4回 参加人数：4名

2011年は7月～8月と1月の2回開講した。7月開講は2名（受講登録者3名）、1月開講の受講者は2名、受講者は、博士課程受験を予定している方、将来修士課程の受験を考えている方それぞれ1名、2回目は、すでに大学院入学が決まり、英語力のアップあるいは、大学院終了し、インドに行くため英語力をアップする目的であった。

7月は全5回を終了し、受講者の英語行動力の向上はみられた。1月は、講師と受講者の都合で、スケジュールを調整し、加えて、受講生の都合で4回の受講となった。パートⅡであるためか、5回受講した受講者は全員基礎力があり、3回目ぐらいから、問題なく教材の英語を読む力が付いたと評価している。スキルアップの目標は、個別な力量の差はあったもののほぼ全員が、講読力が養われたと評価する。

課題は受講生の数の減少である。受講生の目的が、さらなる英語力強化であり、気らくに英語文献を読んでみようという方が少なくなっている。広く看護師の Evidence-based practice に関する理解を深める英文購読クラスにするために工夫が必要である。

■訪問看護スキルアップセミナー

事業主：山田 雅子 開催日：4回/年 参加人数：42名

訪問看護認定看護師に対し、教育課程修了後も継続教育の場を提供するために開始し、今年度で2年目となる。参加者が日頃の実践事例を持ち寄り、事例検討を行っている。テーマは①「褥創管理」、②「緩和ケア」、③「リスクマネジメント」、④「家族看護」を取り上げた。セミナーは訪問看護に従事している看護師が参加しやすいと考えられる土曜日に開催し、時間は13:30～16:30とした。

事前課題で、テーマにおける事例をA4用紙1枚程度に各自まとめてきてもらい、グループ内で共有し、検討事例を決定した上で、1つの事例を多角的にアセスメントし対応策などについて話し合った。参加者は、事前課題を通して、日ごろの実践事例を振り返る機会を得ることができ、「ここの情報が不足していた」と事例を捉えるときの視野が広がったようであった。また、アセスメントツールを用いて事例を分析したり、看護過程にそってケアプランを評価することで、看護の方向性を整理することができ、研修生時代に学んだ看護過程を丁寧に展開していくことの重要性を再認識していた。参加者からは、「何かうまくいかないケースで、もやもやしていたけど、どうしたらいいか分かってきた。」「自分ができていないところが見えてきて怖い部分もあるけど、職場では誰も指摘してくれないし、来てよかった」という言葉があった。今後も実践力の継続的な向上と、修了生の交流の場を提供するため、事業を継続させていきたい。

■不妊症看護認定看護師ポストコース

事業主：森 明子 開催日：1回/年 参加人数：45名

今年度は「ナースのリプロダクティブ・ヘルス」をテーマとした講演と、東北地区の認定看護師による「東日本大震災後の不妊相談から」の報告、グループディスカッションのテーマとして「今後のポストコースのありかた」をとりあげた。

例年の参加者数（50名）を下回った要因として、同領域の日本生殖医学会学術集会の翌日開催としたことにより勤務の調整が難しかったことが考えられる。参加後のアンケートによる本事業の評価は概ね好評であり、講演、報告から新たな視点、知見を提供できたと同時に、グループディスカッションにより交流と親睦を深めることができたと考えられる。自由記述には昼食会で参加者が自己紹介を行うと良いという今後に活かせる意見も挙がっていた。

参加者のニーズを捉えつつ、過年度の経験を活かしながら次年度以降も不妊症看護認定看護師の自己研鑽、交流および親睦を深める機会の一つとして継続していきたい。

■性と健康に関わる専門職のためのリトリート講座

事業主：堀 成美 開催日：1回/年 参加人数：5名

性の健康（Sexual Health）は、欧米では医療における1領域として確立し、専門資格も存在する。しかし、日本国内では、妊娠出産や性感染症といった医療の事象ベースでのアプローチが主流であり、ウェルネスとしてどう位置づけ、また他の健康問題と同じように初期アセスメントをしたり、患者や家族に助言ができるかが専門職の課題となっている。

他の領域と比較し、専門職が具体的に学ぶ学習の機会が少ないこと、また、個別性が強いテーマのため、一般化することよりは、他の専門職との経験共有により経験知を高めることが必要であることが参加者全体で認識された。講師2名が、代替医療、助産師活動を通じて得られた経験を紹介し、その後にディスカッションを行った。

スーパーバイズを受けにくいテーマであるため、日常的に意識化されていない医療者自身の課題や未整理の感情を言語化するための機会が重要と考えられた。

■聖路加感染症アカデミー「看護職のための予防接種講座」

事業主：堀 成美 開催日：1回/年 参加人数：20名

新しいワクチンや行政の公費助成システムの変更等により、市民や患者に提供する予防接種関連の情報が複雑化している。市民や保護者からは、「医療者によって言うことがちがう」「自治体のホームページ情報だけではよくわからない」「多忙な医療者には細かいことを短時間で聞きにくい」「妊娠する前からもっと情報がほしかった」といった具体的な問題指摘があり、市民や患者の感染症予防に最前線で貢献できる看護職に対して、最新情報と、具体的な情報提供や支援のあり方について共有するセミナーを開催。

助産師、大学病院内科看護師、厚生労働所検疫所等、幅広い領域から参加があり、それぞれが得意とする分野の情報や事例の紹介など、相互の経験を共有する機会となった。

■実践・在宅ケア入門～すべての対象者に緩和ケアを～

事業主：山田 雅子 開催日：3回/年 参加人数：26名

在宅での緩和ケアに興味・関心のある看護師を対象に、日ごろの看護技術を振り返るための参加型セミナーとして2011年度より開始した。参加者はすべて訪問看護ステーションの看護師であった。緩和ケアというと、がんのターミナルといったイメージがあるが、すべての患者に対して緩和ケアの視点を持って関わっていくことの大切さが伝わるテーマを選択した。テーマは①「疼痛管理とコミュニケーションスキル」、②「ポジショニング」、③「ノーリフトの実際・在宅看護の実践知」とした。①では新薬についての講習、疼痛のある患者に対するロールプレイを

通してのコミュニケーションの振り返り、②ではベッド・車椅子を使用した安楽なポジショニング、③ではリフトやスライディングシートの実体験、排便ケアなど日頃のケアの工夫に対する情報共有を行った。

参加者からは、「自分が患者役をすることで、患者の気持ちがあった」「体位交換の方法など、ボディメカニクスなど基本に立ち戻ってやっていくことの大切さが分かった」「薬よりもまずポジショニングなど工夫できることがあることが分かった」といった声があった。今後も、実体験を通して学べるセミナーとして、広報を工夫しながら、事業を継続していくこととする。

【認定看護管理者講習・認定看護師教育課程】

■認定看護管理者ファーストレベル講習

事業主：井部 俊子 開催日：2011年8月22日～9月28日 参加人数：97名

ファーストレベル講習には100名の出願者があり99名を合格とした。その後、2名の辞退者があり最終的に97名が受講した。出願者の年齢は20代2名、30代39名、40代54名、50代5名、また、看護師長、主任または師長・主任相当の職位が約40名であった。地域別で見ると、東京都41名、神奈川県28名であった。

科目構成は、看護管理概説、看護情報論、グループマネジメント、看護専門職論、ヘルスケア提供システム論、看護サービス提供論の6科目である。本講習では、各領域の専門家による講義に加え、演習としてTBL（Team Based Learning）での学習形態も取り入れ、受講生の積極的参加とともに、論理的思考力、対人関係能力、記述力・発表能力の向上に寄与している。

受講生によるプログラム評価では、講義内容、講師、講義資料については、約90%の受講生が「適切だった」または「どちらかといえば適切だった」と評価した。またグループ学習、TBLでの演習についても「効果的だった」、「どちらかといえば効果的だった」の評価を合わせて約90%であった。

（本講習は、日本看護協会認定看護管理者制度 ファーストレベル講習の認定教育機関である。）

■認定看護師教育課程（不妊症看護コース・がん化学療法看護コース・訪問看護コース）

事業主：山田 雅子 開催日：2011年6月～2012年2月 参加人数：53名

認定看護師とは、複雑・多様化する社会や医療状況の中で、患者さんの健康問題を多角的に捉える視点を持ち、特定の分野において質の高い医療サービスを提供することができる看護師である。本学では、①不妊症看護・②がん化学療法看護・③訪問看護の3つの特定分野における認定看護師教育を行っている。2011年度の入学者は①10名（定員15名）、②27名（定員30名）、③16名（定員30名）で各コースとも定員に満たない状況が続いているため、コースのあり方について検討しながら、コース運営を行った。各コースのカリキュラムは共通科目、専門基礎科目、専門科目、演習・実習から構成されており、615時間以上を要する。本コースの特徴は勤務を続けながら研修できることで、2011年6月に始まり、2012年2月まで金・土曜日を中心とした講義等を行った。各コース、一方通行の講義ではなく、体験学習やグループワークなど参加型の授業を工夫し、研修生の関心を高める工夫をした。なお、8月下旬から9月下旬までの約1ヶ月は3コース合同で共通科目を実施し、互いに意見交換を行い、視野を広めることができた。3コースとも1ヶ月程度、実習施設に赴き、実践・相談・指導といった認定看護師の役割について臨地実習を行った。9か月の教育課程を経て、修了試験に合格した2011年度修了生は①10名、②27名、③16名であった。

なお、本課程は日本看護協会認定教育機関として認定を受けて、実施している。

■研究相談

担当：八重 ゆかり 開催日：予約制（木曜日午後） 参加人数：延べ33名

研究センターにおける研究活動支援部門の業務として、昨年度より本学研究者を対象とした研究相談を開始した。今年度は、4月から1月末までの10ヶ月間における相談者数は14人（教員4人、博士課程学生7人、修士課程学生3人；のべ相談回数33回）、相談総時間数は63時間であり、1ヶ月あたりの平均相談回数3.3回、平均相談時間6.3時間という実績であった。昨年の初年度（相談者数24人、のべ相談回数50回、1ヶ月あたりの平均相談回数5回、平均相談時間8.7時間）に比べ2/3程度に減少した。また相談内容においては、昨年は、研究計画段階での研究デザインと解析結果の解析方法に関する相談が半数ずつであったが、今年度は結果の解析方法に関する相談のほうが多い傾向にあった。

なお今年度は、昨年度の相談内容を参考に、研究者ニーズが高いと思われる研究方法論および統計解析の基礎知識に関する勉強会を立ち上げ、10月～2月に月1回（木曜日18:00-19:30）、計5回行った。参加希望者は30人と予定（15人程度を予定）を大きく上回ったが、実際の参加者は1回あたり10人程度であり、また前半よりも後半の回での参加者が少ない傾向にあった。この原因としては、1回ごとの内容が独立しており、継続して参加するメリットが少ないと感じられたことも一因と考えられた。

来年度は研究センター事業として「臨床疫学研究入門」のナーススキルアップ講座を開講し、「看護研究コンサルテーション」業務に協力する予定である。「臨床疫学研究入門」講座については、5回全体を通しての系統的な内容とすることで、5回を通して出席するメリットを強調し、参加意欲が継続するような工夫をする予定である。



2011年度 学生の実習および研究・研修の場としてのセンター事業等活用状況

活用したセンター事業等	担当者	学生種別と学年	科目名または研修名	利用者数
るかなび	大橋久美子	学部1年生 学士編入15回生	PCC概論	92名
	山田雅子 田代真理 佐藤直子	認定看護師教育課程研修生 (訪問看護コース)	臨地実習	17名
	松本直子	学部4年生 (立教大学)	図書館実習(司書課程)	1名
闘病記文庫	大橋久美子	学部1年生 学士編入15回生	PCC概論(課題)	不明
赤ちゃんがやってくる	伊東美奈子	学部2年生 学士編入14回生	看護援助論I (コミュニケーション実習)	6名
	片岡弥恵子	学部3年生	家族発達看護論実習	3名
	片岡弥恵子	修士2年生	コミュニティ論演習	13名
ルカ子 ウィメンズヘルス・カフェ	森明子 貫崎美奈	認定看護師教育課程 (不妊症看護コース)	演習	10名
乳がん女性のための サポートプログラム	伊東美奈子	学部2年生 学士編入15回生	看護援助論I (コミュニケーション実習)	4名
天使の保護者ルカの会	蛭田明子 鶴若麻理 貫崎美奈	学部4年生	家族発達看護論II	1名
	蛭田明子 太田尚子	学部4年生 (静岡県立大学)	研修	1名
	堀内成子 太田尚子	修士2年生 (静岡県立大学大学院)	研修	1名
	蛭田明子	保健師 (神奈川県立こども医療センター)	研修	1名
多世代交流型ディプログラム 聖路加 和みの会	小野若菜子	学部2年生 学士編入15回生	生涯発達看護論II	3名
	亀井智子	修士1年生	研修	1名
		海外研修者	研修	1名

2011年度 看護実践開発研究センター 運営委員会・専任研究員・研究支援室スタッフ

■運営委員会

センター長(専任研究員)	教授	山田雅子
研究科長・学部長・WHOコラボレーティングセンター長	教授	菱沼典子
PCC実践開発部門長	教授	亀井智子
PCC実践開発部門 開発担当(専任研究員)	准教授	高橋恵子
PCC実践開発部門 政策担当	教授	山田雅子
PCC実践開発部門 国際担当	教授	田代順子
キャリア開発支援部門長	教授	松谷美和子
キャリア開発部門 教育研修担当	教授	山田雅子
研究活動支援部門長(専任研究員)	准教授	有森直子
研究活動支援部門 研究支援担当(専任研究員)	助教	八重ゆかり
認定看護師教育課程/不妊症看護担当(専任研究員)	助教	貫崎美奈
認定看護師教育課程/訪問看護担当(専任研究員)	助教	田代真理
認定看護師教育課程/がん化学療法看護担当(専任研究員)	助教	本田晶子
認定看護師教育課程/がん化学療法看護担当(専任研究員)	助教	大畑美里

■専任研究員

教授	山田雅子
准教授	有森直子
准教授	高橋恵子
助教	貫崎美奈
助教	八重ゆかり
助教	田代真理
助教	本田晶子
助教	大畑美里

■研究支援室スタッフ

係長	高木裕也
	平良智子
	福田昌
	田口瞳
	中山令子(派遣)



St. Luke's College of Nursing
Research Center for
Development of
Nursing Practice

2011 年度聖路加看護大学 看護実践開発研究センター報告書

2012年5月23日発行

発行者：聖路加看護大学看護実践開発研究センター

発行所：瀬味証券印刷株式会社